

ずらかへぐ急し如がく行を道き遠てふ負を荷き重は生一の人

●俳句と美學との係關
(五)

美人を見て美に感ずるのは男子として正々堂々たるものであるが、血が廻りて居るとか、顔が油くさいとか言ふやうに見ては美感でもなんでもない、石炭を見て石炭質を思つては美を感じたのではない、蓋し美とは感覺と言つたので則ち形で何も質をいふのではない、それで美術といふ一科は獨逸のバウムガルテンが開祖で美術を講ずる以上はバウムガルテンを尊敬しなくてはならぬ、バウムガルテンの前には美術といふ學問は無かつたのだ、美術とばギリヤのユツセテクス則ち感ずることといふ謎から來たので感情と種々の方面から説明し且つ分析して始めて哲學の一科となしたのではない

文苑

●五錢貸して呉れ 百 童

僕は太厩に白狀する、今と去る三年前女は二人殺した、イヤチ整き給ふよ、敢て手合ふ下して殺したのではない、ツマリ精神の病が原因となつて先月死亡したが他の一人の女は自暴自棄して終に娼場女となりて、何うだつたらうして君が成る下の

ルタンを忘てはならぬのである吾人が文學に志し以上は、詩と作るにても、歌と作るにても又俳句を作るにしても此等の形式こそ異なれ皆詩である、形式的作法は各々異なるこそ内容の美は皆同一材料であるから一切の文藝美術は美學上正確に判斷を下すことが出来るのである俳句の意識が明瞭に解つて、他人の句の善惡を宜く判斷し

●無遠慮な人●
光代

的作法を心得て修練が積みさへすれば漸次
成巧の光明に達する事が出来るのである。然
れば同一範圍に於いて書畫彫刻等に向つて
も美術の理想を以て判斷が出来るのである
から文學美術に志す以上は美術を研究して
置かなければならぬ。美術上から俳句を美
なりと賞めて選ぶには想と調とに注意しな
くてはならぬ。然るに現今の作者の俳句を讀
で見ると調に少しも注意して居らぬ、單に
作るといふのみにて若しや宜い句が出来や
せぬかといふ考にて饒幸を願つて居る過一
に本誌に來れば

鈴木さんは實際無遠慮な方です、私今日
はホト／＼呆れました、ナゼって貴郎
マア斯うなのですよ、貴郎の留守に近
さんが参りましてね、奥様濟々ないが重
飯と「」を申すので、それから早速仕度
して御飯を出しますとシホへ鈴木さんが参
つたのですよスルト突然近藤さんの側に化
つた迄は好かつたのですが……呆れるおぢ
わりません、近藤さんが喰べ残したお茶、
煮たのをば「大分旨さうだな」といひなが
ら手づかみでムシャ／＼と食べられています、
本誌に來れば

佐倉宗吾

は、ギス雜誌の如縁に成つてしまつたので、四郎兵衛は全然だごから、青白く成つた。否、否、ギス雜誌に限らず新聞にて、源兵衛に件られ、二階へ登つて来るも何で宜い、美事の判斷の資格のない者、一井筒屋五郎兵衛さん、今多量さんか選出されたからとて何も嬉しいことはな、説に出した。四、先刻は誠に失禮を致した。



して、此御座敷へ踏込みましてございます
が、終ひ御役目と大事と心得まして、右様
な事を致しました。希ぞ偏に御勘辨の程と
願ひ度ございます。五「マアそれなら、郡
方の見廻りであつて見れば、そりや成程
度堀田御ちや、江戸へ出て御鑑訴だの御
門前だの、倒れな喉が立つてゐるから、
六人の名主が来たら、ふん結つて夜更の金
にでも有り付かうと云ふのだから、是か
らは氣を注げなせね、俺上野の宮様、御出
入をして居るんだ、一つ睨みや、れ前進
の首を吹飛ばすくらい何でもねねが、マアれ
前さんか、其處へ氣が付きなすつて、訛と
前さん云ふなら、俺勘辨しねえどねね
が、若ね者が承知しなねから、希かマア、
若ね者へ謝つてくれなせね、四「うれちや若

てゐる。權「酒をドン／＼持つて来い面倒くせ
え。權の鏡を抜いて来い。俺達は一樽や二
樽は、直ぐに飲んで仕舞うんだ。」どうもさ
量いさつばら、飲み食ひひやう、四郎兵衛の
量見ちやあつたが、勘定を見ると、六兩二
五考へてあつたが、勘定を見ると、六兩二
朱二步四百文とある。現今の六兩五十銭や
七圓ではございませぬ此頃は六の六兩二步
と來ると大層なものであります。四「お島
と仰つしやるが、仕方がございませぬ、ド
ン／＼持つて来いと仰つしやるんです。彼
の位の事を爲なくつちや成りませぬ。四「
ろしい食ひもしない物を、源さんでも食は
なくつても、彼だけ出さなけりや承知しな
いんでございます。希ぞ御勘定を願ひます、



つて来い。四「エーうれば仰つしやらんでも用意いたしました。三「仰つしやらねぬでもつて、俺ア手前^てに飲ましてくれど云ふんぢやねぬが、たゞ飲ましてくれるやうな大きな口^{くち}に利^きな、飲^のましてねど思や、此方は此方^{こなた}で幾^{いく}らでも飲^のみんだ、けれども折角持^もて来^こりや飲^のつてやるんだ、筈^{はず}だ。江戸ッ子^こでね、俺ッ達^{たち}の口^{くち}に合うやうな物^{もの}を持^もつて来い。四「ハイ、三「マア宜^{よろ}い、勘^{かん}辨^{はん}してやつたら路^{みち}殺^{ころ}しや仕^{つか}ねぬ。三「オウ、源^{げん}兵衛^{べゐ}さん、此^こ野郎^{やろう}が御馳走^{ごちそう}来^こると云ふんだ、君^{きみ}の付^つけ^けを持^もつて来^こう。三「島^{しま}源^{げん}兵衛^{べゐ}、豫^よて料^{りょう}理^り番^{ばん}に内通^{うちと}してゐるから、酒^{さけ}はドン／＼持^もつて来^こう、肴^{さかな}は腐^{くさ}つた物^{もの}でも何^{なん}でも構^{かま}はず、興^{きよう}を散^ちけて来^こる、廣^{ひろ}い座敷^{ざしき}へ肴^{さかな}を一杯^{いっぱい}持^もつて来^こる、驚^{おどろ}いたのは四郎兵衛^{しろうべゐ}、口^{くち}に持^もつて来^こつて食^くやしないのは四郎兵衛^{しろうべゐ}、心^{こころ}配^{はい}し

四「勘定^{かんじやう}だつて、今^{いま}持^もつ合^あひがない、せがないつて、當下^{當下}も郡^{ぐん}方^{はう}煙^{えん}村^{むら}の御役^{ごやく}でございませう、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す其^{その}代^{しろ}り證^{しん}文^{ぶん}を一本^{いっぽん}願^{ねが}ひます、私^{わたし}イザナ云^いふ時^{とき}は御^ご城^{じやう}文^{ぶん}の役^{やく}人^{にん}でも出^でまして、四^よや間^ま違^{ちが}ふも頂^{いただき}かなければならませぬ、四^よりや然^{しか}うだけれども、餘^{あま}り勘定^{かんじやう}が高い、源^{げん}當下^{當下}は其^{その}様^{やう}な事^{こと}を仰^{おほ}しつしやるが六兩^{りくりやう}二^にや七兩^{しちりやう}で生命^{せいめい}が助^{すけ}かつたんでございませう、此^こ様^{やう}、廉^{れん}い物^{もの}はございませぬ、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す、證^{しん}文^{ぶん}と一^{いつ}つ御^ご下^げさ下^{くだ}さい、四^よ「まさか私^{わたし}が證^{しん}文^{ぶん}も書^かけな

四^よ「勘定^{かんじやう}だつて、今^{いま}持^もつ合^あひがない、せがないつて、當下^{當下}も郡^{ぐん}方^{はう}煙^{えん}村^{むら}の御役^{ごやく}でございませう、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す其^{その}代^{しろ}り證^{しん}文^{ぶん}を一本^{いっぽん}願^{ねが}ひます、私^{わたし}イザナ云^いふ時^{とき}は御^ご城^{じやう}文^{ぶん}の役^{やく}人^{にん}でも出^でまして、四^よや間^ま違^{ちが}ふも頂^{いただき}かなければならませぬ、四^よりや然^{しか}うだけれども、餘^{あま}り勘定^{かんじやう}が高い、源^{げん}當下^{當下}は其^{その}様^{やう}な事^{こと}を仰^{おほ}しつしやるが六兩^{りくりやう}二^にや七兩^{しちりやう}で生命^{せいめい}が助^{すけ}かつたんでございませう、此^こ様^{やう}、廉^{れん}い物^{もの}はございませぬ、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す、證^{しん}文^{ぶん}と一^{いつ}つ御^ご下^げさ下^{くだ}さい、四^よ「まさか私^{わたし}が證^{しん}文^{ぶん}も書^かけな

四^よ「勘定^{かんじやう}だつて、今^{いま}持^もつ合^あひがない、せがないつて、當下^{當下}も郡^{ぐん}方^{はう}煙^{えん}村^{むら}の御役^{ごやく}でございませう、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す其^{その}代^{しろ}り證^{しん}文^{ぶん}を一本^{いっぽん}願^{ねが}ひます、私^{わたし}イザナ云^いふ時^{とき}は御^ご城^{じやう}文^{ぶん}の役^{やく}人^{にん}でも出^でまして、四^よや間^ま違^{ちが}ふも頂^{いただき}かなければならませぬ、四^よりや然^{しか}うだけれども、餘^{あま}り勘定^{かんじやう}が高い、源^{げん}當下^{當下}は其^{その}様^{やう}な事^{こと}を仰^{おほ}しつしやるが六兩^{りくりやう}二^にや七兩^{しちりやう}で生命^{せいめい}が助^{すけ}かつたんでございませう、此^こ様^{やう}、廉^{れん}い物^{もの}はございませぬ、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す、證^{しん}文^{ぶん}と一^{いつ}つ御^ご下^げさ下^{くだ}さい、四^よ「まさか私^{わたし}が證^{しん}文^{ぶん}も書^かけな

四^よ「勘定^{かんじやう}だつて、今^{いま}持^もつ合^あひがない、せがないつて、當下^{當下}も郡^{ぐん}方^{はう}煙^{えん}村^{むら}の御役^{ごやく}でございませう、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す其^{その}代^{しろ}り證^{しん}文^{ぶん}を一本^{いっぽん}願^{ねが}ひます、私^{わたし}イザナ云^いふ時^{とき}は御^ご城^{じやう}文^{ぶん}の役^{やく}人^{にん}でも出^でまして、四^よや間^ま違^{ちが}ふも頂^{いただき}かなければならませぬ、四^よりや然^{しか}うだけれども、餘^{あま}り勘定^{かんじやう}が高い、源^{げん}當下^{當下}は其^{その}様^{やう}な事^{こと}を仰^{おほ}しつしやるが六兩^{りくりやう}二^にや七兩^{しちりやう}で生命^{せいめい}が助^{すけ}かつたんでございませう、此^こ様^{やう}、廉^{れん}い物^{もの}はございませぬ、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す、證^{しん}文^{ぶん}と一^{いつ}つ御^ご下^げさ下^{くだ}さい、四^よ「まさか私^{わたし}が證^{しん}文^{ぶん}も書^かけな

四^よ「勘定^{かんじやう}だつて、今^{いま}持^もつ合^あひがない、せがないつて、當下^{當下}も郡^{ぐん}方^{はう}煙^{えん}村^{むら}の御役^{ごやく}でございませう、宜^{よろ}しうございませう、御^ご賃^{しん}申^{まう}す其^{その}代^{しろ}り證^{しん}文^{ぶん}を一本^{いっぽん}願^{ねが}ひます、私^{わたし}イザナ云^いふ時^{とき}は御^ご城^{じやう}文^{ぶん}の役^{やく}人^{にん}でも出^でまして、四^よや間^ま違^{ちが}ふも頂^{いただき}かなければならませぬ、四^よりや然^{しか}うだけれども、餘^{あま}り勘定^{かんじやう}が高い、源^{げん}當下^{當下}は其^{その}様^{やう}な事^{こと}を仰^{おほ}しつしやるが六兩^{りくりやう}二^にや七兩^{しちり}

豫約募集

本書には統監府軍司令部師團司令部各
理事廳鐵道管理局通信管理局各民團各
商業會議所及び韓國政府中央地方諸官衙
各國領事館職員錄を併載致す

朝鮮紳士錄

豫約特價前金壹部

定價：總欠日一ス金文字入
五圓四角

送本日期：**六月十五日**

申込締切期日：七月十五日日

登載事項

政治家、軍人、官吏、公使、海陸財政家、實業家、宗教家、藝術家、職業家、學者、記者、編輯者、組合員等。

豫約申込所
 發行所
 京 城 西 小 門
 本町二丁目
 本町二丁目
 新王城前
 北署安洞
 中署廣橋東邊
 中署龍朝橋越邊
 南大門通
 本紳士錄交詢社式
 の日韓清英米佛獨其他紳士の全
 羅致候へば公私實務者の坐与
 からさる要書に有之候

城新報
 文林書
 盛韓書
 大韓書
 滙東書
 中東書
 義生盛
 本紳士錄交詢社式
 の日韓清英米佛獨其他紳士の全
 羅致候へば公私實務者の坐与
 からさる要書に有之候

社 房 堂 林 館 號
 社 房 堂 林 館 號

開業廣告

人婦せんざい
めま湯酒
岸遊
旭町一丁目三番

美術書畫
襖壁天井張
京橋露町一丁目
桂萬吉

